

今回の「語ルシストの会」の事例報告は、訪問看護ステーションつむぎの代表の橋口英治氏に話して頂きました。

去年の9月に地元の佐土原町に訪問看護ステーションを開所して1年が経ったところでの思いを話して頂きました。

最初に語ルシストの会に参加された時は、訪問看護ステーションぱりおんに勤めておられている時に紹介で来られて、毎月の定例会に参加して積極的に意見交換をしながら自らを啓発されて今があるのだと思える。

訪問看護ステーションを開設する動機として、祖母が体調を壊したときに認知症と判断して施設に入れたことが忘れられない記憶になっていて、そのことが看護師になる要因の一つであり、認知症認定看護師になって学ぶ中で、一過性のせん妄ではなかったか、自宅で穏やかに過ごしたいという意志を認知症と判断して施設に入れたのではないかと内省していることが、訪問看護ステーションの理念として、「自分の家で過ごしたい」ということを叶えるためにスタッフと最善を尽くして地域訪問支援を行っているということである。

地元の佐土原町の高齢化や認知症者数など現状に関して話されて、物産・特産として、うなぎ・くじらようかん・佐土原なす・佐土原人形などがあることを話される。

訪問看護ステーションとして、「地域を知る」ということで、地域の民生委員や事業所から地域の現状を教えてもらい困りごとを伺うことからつながっていくことをする。

「連携」ということで他の施設や事業所からの要望に対して最善を尽くして対応することをスタッフ共々丸になって学び考える姿勢で進む。

「スタッフと共に」ということで、利用者の生活をより良くすることを目指して共に学び研鑽することを推進し、理念や地域支援のコンセプトを共有して進むことをやっていく。

など、訪問看護ステーションの姿勢を明確に話される中で、私自身の琴線に触れる言葉があったので記載します。

認知症状が悪くなってから介入するのではなく、認知症に対する予防を推進することに力を注ぐことで、悪くなって家族で対応できないということにならな

いためにも予防を積極的に推進したいが、そのためには人材や収益がないと推進できないので、事業を複合型にすることで、収益を上げて予防に活用することを考えておられて、訪問看護ステーションでの地域密着を考えると小規模多機能施設やグループホームを併用した複合型の事業所運営をビジョンとして構想されているということをお話される。

地域で「住み慣れた場所（自宅など）で安心して暮らせる」ことを支援することを果たすには、一事業（訪問看護ステーション）では限界があり、利用者のステップアップによる全人的な支援を推進するには、複合的な連携や事業を想定した運営を考えることが運営者には求められている時代になり、利用者にとっては必然的により良い人生を描くことが可能な時代になったと思える。

ただ、資本主義社会には利用者や患者を食い物にする事業者がいるのも現実で、そのような事業者を選ばない情報も周りの真摯な支援者から得ることで、最善の選択をして挑戦と希望を持ちストレングスを発揮する人生を歩いて行ってもらいたいと思う。